

(熊本県立北稜高等) 学校 令和 6 年度 (2024 年度) 学校評価表

1 学校教育目標

校訓「創造」「勤労」「感謝」のもと、専門性を生かした学びを通して、望ましい勤労観・職業観を身に付けるとともに、地域を知り、郷土愛を持った、将来の地域社会を担い、活躍できる人材を育成する。

「教育は人なり」の理念のもと、教職員が一丸となって、生徒一人一人の自己実現を支援する。

- (1) 伝統ある校風の継承と創造 (2) 特色ある総合高校づくり (3) 学力の充実と個に応じた進路指導 (4) 教育環境づくりの推進
(5) 人権教育の推進 (6) 安全教育の推進 (7) 地域社会から信頼される学校づくり

2 本年度の重点目標

(1) カリキュラム・マネジメントの更なる推進

ア 新学科の学びの構築 (夢を叶えるカリキュラムの充実)

イ 3つの特徴を生かした夢実現への取組 (進路目標の充実)

(7) 魅力的な専門教育の実践

(4) 学科を超えた多様な選択科目

(7) 総合的な探究の時間

ウ 普通科の学びの集大成に向けて (共通教科の学びの充実)

(2) 学校魅力化と生徒募集に向けた取組

北稜高校の活性化 (交流活動、体験活動、情報発信)

(3) 生徒一人ひとりの進路指導の充実～北稜高校で夢実現～

ア 「創造・勤労・感謝」を柱とする心の教育の実践

イ 学力の充実と個に応じた進路保障の実践

ウ 「環境が人を作る」という教育哲学の実践

エ 安全教育の実践

オ 地域社会との連携強化の実践

(4) 働きやすい職場環境づくり

ア 相談しやすい職場環境

イ ワーク・ライフ・バランス

ウ 時差出勤の有効活用

3 自己評価総括表

評価項目		評価の観点	具体的目標	具体的方策	評価	成果と課題
大項目	小項目					
学校経営	目標管理	スクール・ミッション及びスクール・ポリシー、重点目標の周知・理解のため、学校情報を分かりやすい内容で定期的に発信する。	全職員が共通認識として実践する。生徒、保護者にスクール・ミッション及びスクール・ポリシーを85%以上認知させる。	・職員会議や研修等で常時啓発する。教室への掲示、学年集会等、全校集会での周知。 ・学校評価アンケートによる認知の分析 ・育友会総会、広報誌、学校行事やHP等を通じて啓発を図る。	B	・評価アンケートの結果、伝わっていると回答した生徒の評価平均3.1p、保護者3.3p、教職員3.6pであり、昨年度より向上した。 ・認知度は評価アンケートより生徒88.40%、保護者96.9%の結果となり、目標値を達成できた。次年度は全学年が4学科の体制となるので、今後もHPや資料を活用し、継続した啓発が必要である。
	生徒募集	募集定員の確保。	今年度入学者(51名)に対して20%増の志願者確保を達成する。	・計画的な中学校訪問、地域行政等との連携、体験入学の実施、学校内施設を活用した小中学校との交流学習の実施、HP、SNS等で魅力ある学習内容の広報充実を図る。 ・生徒の意見を踏まえたわかりやすいパンフレットの作成。 ・HPブログ、SNSを活用し、学校生活の情報発信を強化し、毎月5000アクセス数以上を達成する。	B	・生徒募集に向けてパンフレットの作成、Youtube(動画配信)による配信を継続し、学校公式Instagram(SNS)を新たに開設し、学校PRを行った。前期(特色)選抜の志願者は、昨年度より13名増加した。 ・学校HPへのアクセス数は、1月末で285,718件となり、昨年度(112,792件)の2倍以上となった。また、毎月約14,000～47,000アクセスを達成した。

学校運営	業務改善	生徒たちと向き合う時間を確保し、やりがいを持って効果的な教育活動を持続的に行うことができる環境の実現	教職員の勤務時間の削減を図り、教職員が本来の業務に一層専念できる環境を整える。 文書事務における業務負担の改善、業務の効率化及びペーパーレス化を実施し、校内の各種会議を削減する。	<ul style="list-style-type: none"> 一人1台端末の積極的な活用に向けて、業務効率を高めるアプリの紹介を含めた校内研修を月1回以上実施し、職員のスキルアップを図る。 校内ネットワーク内の整理・活用による業務資料及び生徒情報管理の統一化の徹底、校務支援システム、メール等の有効活用による会議等の削減 朝会、各種会議のペーパーレス化を図り、職員の印刷、配布、資料整理に係る業務を軽減する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> I C T機器活用に関する職員研修を教務部主体で月1回以上実施し、全職員が授業研修に取り組んだ。 運営委員会、職員会議、朝会資料等のペーパーレス化が定着し、印刷用紙やインク等の経費削減や業務効率化につながった。 採点システムが導入され、職員研修を実施したが、本格的な運用はごく一部に限られた。
学校経営	働き方改革	教職員が心身ともに健康で、ワーク・ライフ・バランスを実現できる環境を整える。	全教職員が働き方改革の必要性を理解し、月の時間外勤務時間の平均が上限の45時間以内、年の時間外勤務時間合計540時間以内を全職員の75%以上実現。	<ul style="list-style-type: none"> 学校閉庁日・部活動休養日の計画的な設定。 時差出勤の運用。 教職員1人当たり年次有給休暇について、平均取得日10日以上への推奨。 業務の平準化のための校務分掌の見直し。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 学校閉庁日を5日設定し、生徒・保護者へ周知した。部活動休養日は顧問会で共通理解を図り、平日1日及び土日の1日を休養日とした。生徒連絡やHP等でも毎月周知した。 1月末までの時間外勤務時間は月平均33:09h（昨年度34:47h）であり、減少した。また、月平均45h以内の職員は全体の84.3%（昨年度79.6%）であり、より改善されている。 職員の約6割が年間10日以上年次有給休暇を取得し、取得日数の平均は、約13日であった。 夏季休暇を5日間全て取得にした職員の94.4%であった。 時差出勤は全職員の3割以上が利用した。
	開かれた学校づくり	保護者・地域行政等との連携。	学校行事等の参加啓発、地域関係機関と協働した行事の企画、新学科の特色を生かした新たな取り組みの発信を行い、本校の魅力化を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 学校保護者連絡システム「すぐる」を活用した学校行事等の案内と参加啓発を行う。 地域行政との事業推進、高大連携及び企業間交流を実施する。 インターンシップや体験教室、農産物販売、ボランティアなど、地域における生徒の活動機会を創出し、地域協働を実現する。 学科ごとに小・中学校との交流事業を推進する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 玉名市との地域連携では、「玉名未来づくり研究所」に参加し、総合的な探究の時間の成果につなげた。 玉名市内の県立3校によるOneteamプロジェクトに参画し、高校まつりや商業施設等でのワークショップ、作品展示を定期的に実施した。 各学科の学びを生かし、造園科による箱庭の作成展示、玉陵小・中学校との門松作り、幼稚園との廃材を活用した食育交流、小中学校との花壇づくり、収穫体験、販売等を行い、地域に根ざした交流活動を実施できた。また、今年度新たに玉名町小学校との農業体験交流をスタートし、J Aたまなと協働し、校内を利用した親子農業体験を年間3回実施した。
学力向上	授業の改善	授業に関する評価の向上。	「授業と評価の一体化」に的を絞った職員アンケートを実施し、授業改善に取り組んだ職員が過半数に達する。	<ul style="list-style-type: none"> 評価を意識した研究授業を各職員が実施する。その上で実際の評価の結果を職員間で共有し、評価の方法や結果について検討する。 観点別評価に関する職員研修を実施し、評価に関する考え方や方法などについて職員の理解を深める。 I C T研修の実施方法について職員の意見を募り、実際に授業で活用できる研修内容を工夫する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 全職員の研究授業と、評価に関する研修を実施した。学校評価アンケートでは、96%の職員が今年度授業研修に取り組んだと回答があり、授業改善のきっかけとして有効であった。さらに具体的な評価法を含めた研修を深めていく。 I C T活用研修も工夫して実施できている。一方で参加する職員が固定化しているため、実施方法の工夫を検討する。

学力向上	学力の向上	基礎学力の定着。	各学期末における欠点保持生徒の数を、年間を通じて減少させる。 「基礎力診断テスト」において、評価レベルが昨年度より向上した生徒の数を増やす。	<ul style="list-style-type: none"> 学年ごとに、北校タイムや放課後学習の時間を活用し、基礎学力向上に取り組む。 各教科において、低学力者を中心に個別指導を実施し、理解の向上を図る。 「基礎力診断テスト」実施2週間程度前から、事前課題に取り組み基礎的事項を再度確認する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 2学期末の欠点保持者が、昨年度21人から今年度13人に減少した。ただ昨年度は不登校生が多かったため、学力が向上した実感はない。 基礎力診断テストも学年によって増減があるため、全体としては現状維持であった。基礎学力対策をさらに工夫していく。
キャリア教育（進路指導）	進路意識の啓発	進路の早期決定と目的意識の啓発。	各学年・学科の連携と継続した進路指導の展開。 全職員によるキャリアカウンセリングの実施。 生徒の諸活動の振り返りを通して、進路指導を充実させる。	<ul style="list-style-type: none"> 年間を通し職員に対するキャリアカウンセリングの啓発活動を行う。 進学ガイダンス、職場見学、インターンシップ、オープンキャンパス等に積極的に参加する。 キャリアパスポートを活用し、生徒自身が自己を振り返る機会を設け、それをもとに進路意識を高める指導を行う。（手帳等の活用） 1年生は科目「総合的な探究の時間」で系統的に進路学習を行う。 ChromeBookを活用して、進路情報の提供等を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 進路関係行事や研修等の参加を促すとともに、進路情報を共有し担任による進路指導につなげている。 対面による進路関係行事の開催が増え、数多くの進路ガイダンスに参加し進路情報を収集することができた。 キャリアパスポートに各種行事の記録を残し、自己の振り返りの機会を設け、進路意識の向上につながった。 1年の「総合的な探究の時間」は、系統立てて進路学習ができた。 ChromeBookを活用し、求人票等の進路情報の提供が容易になった。
	進路希望の達成	進路目標実現の進路保障	進路選択におけるミスマッチを解消し、個に応じた就職・進学体制の確立と進路目標達成100%を目指す。	<ul style="list-style-type: none"> 全職員で情報の共有化を図り、組織として進路指導にあたる。 3年生は「総合的な探究の時間」で各自目指す進路分野に関する探究活動を行う。 進学希望者へは、学力向上に向けて放課後学習会などを活用し、個別指導の充実を図る。 職員は、各種説明会等に積極的に参加し、入試制度等の変更や採用選考等について生徒に情報提供できる体制を強化する。 就職希望者は、就職支援キャリアサポーターや就職支援担当教員を中心に面談を行う。 企業訪問を積極的に行い、得た情報を生徒への指導、支援に生かす。 個別対応が必要な生徒は、保護者と連携し、適切な進路先を決めていく。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 情報提供はChromeBookで行えるようになった。全職員が利用しやすい工夫が必要である。 3年の「総合的な探究の時間」では、自分の適性と希望する進路について考え、進路決定につなげることができた。 計画的に放課後学習会を行うことができた。基礎学力を付けさせるためには、学習習慣を定着させる必要がある。 入試制度や採用選考が多様化しており、さらに情報提供が必要である。 計画的な就職希望者面談や就職だより等での就職情報を提供することで進路決定につなげている。早期離職防止に向けての対策が必要である。 今年度は基礎学力不足等で不調だった生徒が多く、今後さらなる学力保障への取組が必要である。 支援を要する生徒が増加傾向にあり、教育相談部や各種機関と早期に連携する必要がある。
生徒指導	基本的生活習慣の確立	整容の定着	生徒が主体的に校則の見直し（クラス討議→代議委員会→生徒総会→検討委員会）に取り組むことで、整容に関する意識向上及び定着を図り、指導対象者ゼロを目指す。	<ul style="list-style-type: none"> 各学期始めの整容検査を全校一斉に実施し、全校生徒及び教職員が共通理解の上で整容を徹底する。 継続指導対象者の状況等を教職員間で情報共有しながら、全教職員で個別の指導、支援にあたる。必要に応じて学年毎の整容検査も実施する。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 各学期始めに実施する整容検査では、1学期32名2学期16名、3学期33名と減少から増加へと変化し、まだ整容に関する意識が高まったとは言えず、生徒が自主的に整容を整える習慣が身に付くような対応を考え、今後も継続した形で、再検査対象0を目標に指導をしていきたい。 生徒会による協議、生徒指導部会、各学年会での共通理解を深めながら、段階的に整容面での定着を図ることができるようになってきた。

生徒指導	基本的生活習慣の確立	マナーの向上	自発的に元気な挨拶ができ、ＴＰＯに応じた言葉遣いや適切な行動ができる。 スマートフォンの利用マナーを向上させるとともに、問題行動件数を昨年度の半数以下にする。	<ul style="list-style-type: none"> 積極的な挨拶や公共の場におけるマナー向上を図るため、日々の授業や学校行事等で継続した指導を行う。 生徒会（各種委員会活動を含む）を活性化し、生徒が主体となり、校則の遵守やマナーの向上に向けて継続した啓発活動を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> 登校指導での呼びかけなどでは、大部分の生徒が積極的に挨拶ができているが、校内での様子を見ると、まだそれが習慣的になっているとは言えない。その場に応じた適切な言動を実践できるよう指導したい。 問題行動件数は昨年度より大幅に減少し、５件６名であった。今後も継続指導を怠らないようにしたい。 スマートフォンの指導件数は、昨年度１２件から１６件と微増しているため、今後も継続してマナーアップを図っていきたい。
人権教育の推進	人権・同和教育の推進と命を大切に育む指導の取り組み	差別に気付き、いじめや差別を許さない心を育てる授業実践	被差別部落の歴史をはじめ、水俣病やハンセン病に関する差別、就職差別や結婚差別について、生徒が自らの生き方と重ねて考えることができるような授業実践を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 生徒の心に訴えかけられるような授業実践を行うことを目指し各学期の授業において、各学年で事前研修会を行う。 各学期の授業について、各学年の人権教育推進委員と指導案や提示する資料の検討を行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> それぞれの差別事象について学習したことと自らの体験や考えたことを重ねて考えさせることに意識的にとり組んだ。 毎学期の人権教育ＬＨＲに際して、教材を見直すとともに、学習指導計画の素案を作り、各学年の担当者が各学年ごとの実態に応じて学習内容の検討を行い、授業を実施した。
		教職員が人権・同和教育に主体的に取り組む研修体制の充実	人権・同和教育に関する研修会への参加や、自らの取り組みを見つめ直すレポートの作成を通して人権感覚を磨き、人権意識を高める。	<ul style="list-style-type: none"> 人権教育に関する校外研修について、年間２回以上の参加を本校職員に促す。 校内における人権教育に関する研修の内容の充実を図るとともにレポート研修会への全員のレポート提出を目指し呼びかけを行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 多くの職員が年間２回以上の校外研修に参加することができた。引き続き学年単位で参加者を募ることで研修参加への意識が高まり、昨年度より校外研修参加者を増やすことができた。 ７月の全員レポート研修会では、ほぼ全員がレポートを作成し、研修会当日には、各自の教育実践を人権教育の視点で検証しあうことができた。
いじめ防止等	命を大切に育む指導	心のきずなを深める取り組みの充実	心のアンケートや二者面談を中心に生徒の思いを把握する。また、他者を思いやる心を育てる取り組みを心のきずな委員会中心に行う。心のきずなを深めるＬＨＲの充実を図る。	<ul style="list-style-type: none"> 各学期で行う心のアンケートの結果を全職員で共有するとともに、担任による二者面談を各学期で実施する。 心のきずな委員会を対象とした研修を実施する。 心のきずなを深めるＬＨＲの事前研修会を各学年で実施する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> 各担任とも面談週間に限らず適宜二者面談等を実施し、生徒との信頼関係を構築した。 文化祭では人権啓発資料や標語・ポスターを展示し啓発活動に取り組むことができた。また、年間４回の委員会や熊本県人権子ども集会の視聴を行い、いじめや差別を自分事として考えることができた。 心のきずなを深めるＬＨＲについては各学年における事前研修を行い、生徒が主体的に学びあう授業づくりを行うことができた。
	全生徒にとって安心・安全な生活ができるいじめのない環境の確立	いじめを早期発見、解決する組織づくり	生徒の変化やサインについて、定期的に職員間で情報を共有し、情報集約担当者を起点とした組織的な対応を行う。	<ul style="list-style-type: none"> 「スクールサイン」アプリの登録について、全校集会時に説明するとともに、継続的に登録を呼びかけ、半数以上の生徒に登録させる。 「いじめを受けた」と回答した生徒がいた場合は「いじめ防止対策委員会」で組織的に対応する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> スクールサイン及び各相談窓口について年度当初に周知を図り、約８割の生徒に登録させることができた。 いじめが疑われる事案については、いじめ防止対策委員会を開いて協議を重ねながら、外部専門家の助言を踏まえて組織的な対応を丁寧に取り組むことができています。

地域連携 (コミュニティ・ スクール)	学校運営 協議会 (総合型 コミュニ ティ・ス クール) における 学校運営 協議会の 推進	学校運営協議会での 共通理解と協力体制 の構築による円滑な 運営。	本校の魅力化や特 色の発信等に向け た意見交換・議論 を行い、地域協働 による教育活動の 活性化に繋げる。	・年間2回以上、学校運営協議会 を開催。 ・各委員から幅広く意見や疑問、改 善案を伺い、学校運営に活かし、 学校課題の解決についての評価 を行う。	B	・年間2回の会議を実施し、生徒の実 践発表等を今年度も継続して実施 し、本校生徒の取組や現状を知って いただく機会となった。 ・授業見学、体育大会、北稜祭（文化 祭）への案内を行い、本校の教育活 動を参観いただいた。 ・今年度の本校の課題解決に向けご意 見と評価をいただき、次年度の具体 的目標の設定に繋げる。
		防災教育の充実及び 災害時における生徒 の健康管理等、危機 管理体制の構築 災害時に必要となる 備品や備蓄の確認。	日常的な防災意識 を高めるための防 災教育と避難訓練 の実施。 学校防災マニュアル (豪雨・土砂によ る災害、地震津波 等)、防災組織・指 示系統や連絡体制 等の各自の役割に ついて職員間の共 通理解。 定期的な備品の確 認、危険箇所点検 の実施。	・避難訓練を年2回以上実施する。 ・生徒に時間等を知らせず実際と 同じ緊張感を持たせ実施する。 ・防災マニュアルおよび避難所運 営マニュアルの点検と内容確認 を行う。 ・職員間での共通認識を図り、日常 的に学校危機管理意識を高め、 教科と関連付けた防災教育に取り 組む。 ・年1回の備品点検を行う。 ・危険箇所等の点検を学期ごとに 行う。	B	・シェイクアウト訓練を年2回、防災 避難訓練を1回、計3回の訓練を行 うことが出来た。また、職員の防災 意識の向上につながった。 ・避難訓練後のアンケートを取った結 果96.5%が出来た・良く出来た の回答であった。 ・備蓄品の点検を4月に行いことが出 来た。また備蓄品の数が少ないので 買い足す必要があると思う。 ・危険箇所の点検など防災担当者で各 学期毎に行うことが出来た。(校舎 内外)
特別支援 教育	特別な支 援を要す る生徒へ の適切な 対応	組織的な支援計画及 び指導計画の作成と 確実な支援の実施及 び評価	支援を要する生徒 について、支援計 画及び指導計画を 作成し、切れ目の ない支援を行う。 支援を要する生徒 が安全に安心して 学べる合理的配慮 に学校全体で取り 組む。	・特別支援教育支援員配置事業を 活用して、特別な支援を要する 生徒に確実な支援を行う。 ・特別支援校内推進委員会を適宜 開催し、校内での支援体制の方 針決定や情報共有を行う。 ・荒尾支援学校巡回相談員と連携 し、支援計画及び支援計画の見 直しや進路指導の指導助言を仰 ぐ。	B	・支援員による支援を要する生徒につ いて、担任、教科担当者、支援員、特 別支援コーディネーターで随時情報 交換会を行い、指導計画の作成や見 直しをし、個に応じた支援に取り組 むことができた。 ・特別支援教育委員会を開催し情報共 有を行うことができた。 ・教育相談部会を月2回開催し、支援 の成果と課題について意見交換し、 支援の改善に努めることができた。 ・巡回相談員制度の周知が不十分で活 用することができなかった。
環境教育	環境調和 型社会の 実現及び 校内美化 の推進	環境保全活動や学校 版環境ISOなどの 啓発活動。	教室移動時の消 灯、ゴミ 分別の徹 底、また、学期ご とに安全点検を実 施し安全な環境 づくり。 生徒：水道使用量 を前年 度比 5 % 削減。 職員：印刷 用紙使用量を 前 年度比 5 %削減。	・全生徒へ集会、ポスター等で呼び かけ、啓発活動を行う。	B	・生徒への呼びかけにより、教室移動 時の消灯、ゴミの分別は徹底できた。 今後はごみの減少に取り組みたい。 ・安全点検においては学期ごとに職員 が行い、修繕箇所は事務室に早急に 対応していただいている。 ・水道使用量、印刷紙使用量について は生徒減少の影響もあると感じられ るが、おおむね達成できている。
	環境調和 型社会の 実現及び 校内美化 の推進	校内美化、地域にお けるボランティア活 動の実施	各学期、各学年で の学年別掃除の充 実。	・学年別掃除を体育大会等の学校 行事前に実施。・美化意識向上 を図る。 ・アンケートによる生徒自己評価 の実施。	B	・生徒数の減少により毎日の掃除で実 施できていない。外庭等の掃除につ いては、学期ごとに行われる学年別 掃除において、各学年の協力のおか げで学校行事前に実施し、徹底でき た。 ・3学期の1年生大掃除では卒業式へ 向けて、1階トイレの大掃除をとり 入れた。 ・アンケートは実施できなかった。

保健管理	健康に関する指導体制整備	各個人での感染防止対策の継続	感染防止対策の必要性を理解し、自主的な行動で感染防止対策を行う。	<ul style="list-style-type: none"> ・マスク、手洗い、消毒、また、昼食のとり方、歯磨き時の注意点についても自主的な行動で感染防止を行う。 ・消毒等も必要に応じて自主的に行う。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・CO2モニターの設置、効果的な換気の呼びかけまた、保健員が手洗い場の石鹸の補充を行うなど取り組むことで生徒の感染症予防の意識が高まった。 ・コロナウィルス感染種対策が終わったが、各教室に消毒を設置し、継続して行っている。
	健康に関する指導体制整備	規則正しい生活習慣の確立	生徒が「自身の健康」に興味関心を持ち、自己管理できる。	<ul style="list-style-type: none"> ・健康診断の事後指導を徹底する。 ・校医、育友会、専門機関との連携を図り、生徒の健康課題を共有し課題に対しての取り組みを行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・歯科検診後、未受診の生徒へは個別指導を行い、虫歯の進行についてや医療費についてなど、一人ひとりに話をすることができた。治療率は25%にとどまっているが、個別指導することで生徒の思いや実態を知り今後のアプローチの仕方について考えることができた。 ・学校保健委員会では本校の健康課題について校医、育友会と一緒に考え、意見交換をすることができた。
	健康に関する指導体制整備	保健相談の充実	心身共に健康で落ち着いた学校生活を送ることができるようにする。	<ul style="list-style-type: none"> ・科・学年・担任と連携を図り、個別での指導を中心に行う。必要に応じて学校カウンセリングを活用するとともに、主治医との連携を図る。 	B	<ul style="list-style-type: none"> ・教育相談を行った生徒に関して担任・学年主任と情報共有・連携し、必要に応じてスクールカウンセラー（SC）やスクールソーシャルワーカー（SSW）につなぐなどの対応を適宜行い、落ち着いた学校生活を送ることができるよう支援を継続した。 ・個別のケース会議を必要に応じて行い、SCやSSWとの情報共有を踏まえながら、生徒の支援を実践した。
専門教育	専門教育の充実	魅力ある学科づくりと地域への発信	【園芸科】 花壇交流会など交流活動を積極的に行う。 学校ブログを活用し、学科の情報を発信する。	<ul style="list-style-type: none"> ・近隣中学校との花壇交流会や収穫交流会を実施する。 ・学校ブログに各部門の授業の様子をアップしてもらえるように情報を提供する。 ・中学生がより関心をよせられる内容にするため、生徒目線の情報提供を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・地域の中学生との花壇交流会や、小学生との野菜栽培交流会を実施するなど、多くの機会をもうけることができた。 ・JA玉名と連携して、ブドウ狩り体験やイチゴ狩り体験を実施し、農業の魅力や本校の取り組みについて外部への情報発信をすることができた。 ・学校紹介用の写真において、生徒が撮影した写真を活用するなど、生徒目線での情報発信を行った。 ・学校ブログへの情報提供において、特定の部門からの情報発信が多くなってしまったなど、偏りがあった。
			【造園科】 地域連携を図り、地域の行事やイベントの出展など積極的な参加を実践する。 学科の特色を生かした情報発信。	<ul style="list-style-type: none"> ・自然文化財の管理に年2回参加する。また、授業で学んだ専門的知識や技術を地域に還元し、地域交流などを通してやりがいと達成感を身に付ける。 ・特色ある学科の取り組みや生徒の活動を記したポスター等を作成し、地域へ情報発信する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・県指定天然記念物「山田のフジ」の剪定に2回参加できた。地域の方々とも連携や交流を深めることができた。 ・近隣の幼稚園や小中学校と連携し、交流活動や門松製作ができた。また、玉名市民図書館などにも箱庭を展示し、造園の魅力を伝えることができた。 ・交流活動の際には、報道機関等及びブログやSNS等を活用して学科のPR活動には力を入れることはできた。また、学びの祭典において、学科の特色でもある活動ポスターや体験活動をととして、情報発信できた。

専門教育	専門教育の充実	魅力ある学科づくりと地域への発信	【商業科】 生徒間での学び合いを通して自主性を高める。 体験入学や文化祭、学校HP等を活用して、学科の取り組みを発信する。	<ul style="list-style-type: none"> ・自主的に商業の技術を身に付けるために、学科集会をはじめ、3学年が一緒に活動する時間を増やす。 ・中学生や地域の方に活動内容がわかりやすく伝わるように工夫する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・学科集会を学期に1回、施し、学科の連携を強めることができた。昨年に続き、速度大会を実施できた。 ・北稜フェア（販売実習）前は、学科での活動時間を計画的に設定し、3年生がリーダーとなって活動できた。 ・体験入学は学年・個人での役割分担を行い、学科全体で取り組んだ。 ・北稜祭の約3か月前から、商業科の活動をInstagramで定期的に発信した。
			【家政科】 幅広い学習や体験活通して、生活力を高め、豊かな人間性を育成する。 学科の取り組みを地域へ発信する。	<ul style="list-style-type: none"> ・専門科目や学科行事等で、地域との連携・交流の機会を増やし、人との繋がりを学ぶ。 ・北稜日記で生徒の学習や活動の様子を発信する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・玉名市福祉協力校としての取り組み（地位高齢者との交流、地域施設への布カレンダー寄贈）ができた。 ・玉名市や地域企業と連携し、トマトふりかけを完成・販売できた。 ・地域や他学科との連携による交流活動（幼稚園での遊びの伝承）を実施できた。 ・学校HP（北稜日記）や行事（文化祭）、学校説明会、地域での学科紹介・作品展示で魅力発信できた。 ・文化祭食物バザーでの郷土料理（あん餅雑煮）の普及活動ができた。
専門教育	高い専門性と職業観の育成	専門性の向上と将来を見据えた系統的な学習展開	【園芸科】 地域連携したプロジェクト学習を行い、生徒の達成感を高める。 教育課程に適した農場計画を行い、生徒の経営感覚の醸成とコミュニケーション能力の向上を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・先進農家や企業、農業大学校と連携し、現場実習や先進地研修の充実を図る。 ・経営感覚を育成できる教材の選択や販売実習等を取り入れた農場経営を行う。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・県立農業大学校との連携プロジェクト学習や、先進地研修の実施など、外部機関を連携した学習活動を行い、生徒たちの学びを深めることができた。 ・各部門において販売実習を行い、生産と消費について学ぶ機会をもうけるなど、経営者感覚を養う授業展開を行うことができた。
			【造園科】 外部講師による高度な専門技術の習得。 充実した現場実習の実践。	<ul style="list-style-type: none"> ・企業や専門職の方々との連携し、専門的知識・技術を習得する。 ・現場実習を通して、社会人としての望ましい態度やコミュニケーション能力を学ぶ。また、職業人としての資質を育む。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・就業支援プロジェクト事業でものづくりマイスターの方々より、専門的知識と技術の向上につながる指導を受けることができ、造園技能検定の合格率も90%を超える結果につながった。 ・現場実習を通して、基本的な生活習慣の必要性やコミュニケーション能力を学ぶことができた。受け入れ企業の評価も全体的に見て良い評価を得ることができた。学んだことを次のステップに生かせるよう指導していく必要がある。
			【商業科】 インターンシップや販売実習など実践的・体験的な活動を通して、専門性を高める。 コミュニケーション能力の育成と進路意識の向上を図る。	<ul style="list-style-type: none"> ・体験的な学習を通して自己の課題に対する改善と進路目標の設定を行う。 ・外部講師を招へいし、様々な場面を設定した基礎的なコミュニケーションの方法を学ぶ。 ・実際の店舗経営にあたり、前年度の課題を踏まえ、3年生を軸に学科全体で解決する能力を育成する。 	A	<ul style="list-style-type: none"> ・外部講師を招へいし、ビジネスマナーを学びコミュニケーション力を身に付けた。キッチンカーの代表3人の方に経営戦略や接客に関する講話をしていただき、生徒の学習意欲が高まった。協賛企業にも何度も足を運び、仕入交渉から書類作成など、実践的な体験をすることができた。 ・販売実習は、3年生を中心に全学年で分担・協力して取り組んだ。前年度の課題・反省が活かされ、全学年ともに、協力して活動できた。特に2、3年生は各自で具体的な行動目標を持って取り組むことができた。

専門教育	高い専門性と職業観の育成	専門性の向上と将来を見据えた系統的な学習展開	【家政科】 家庭に関する専門科目や外部講師による学習を通して専門性を高める。進路意識や職業観の向上を図る。	・地域との連携や専門職の方を招いての講習会を実施する。 ・地域施設での実習など交流の機会をつくる。 ・実践的体験を増やす。	A	・専門の外部講師による講習会（食の名人講習会、味噌玉作り講習会、浴衣着付け講習会、和菓子講習会、福祉講習会、中国料理講習会、テーブルマナー講習会）を実施できた。 ・社会見学（ソーセージ作り、企業（株マークス）、玉山市防災館）を実施した。 ・さまざまな体験学習を通し、生徒の進路意識を上げ、進路目標の早期設定を目指す。
------	--------------	------------------------	--	---	---	--

4 学校関係者評価

○生徒を校外で見かけるが、とても良いと感じている。

○学校HPのブログ閲覧数が大幅に伸びたことは評価できる。今後はアプリ等を活用して閲覧の詳細な分析を進めると良いと思う。

○トマトふりかけ「たまフル」の商品開発はとても素晴らしい取組である。今後は取組の継続や利益等の活用について考えていく必要がある。

○タイ王国海外研修は昨年度も生徒や保護者に紹介していただき、良い成果が得られている。今年度参加した生徒の発表についても準備していただき、学校のPRにつなげてほしい。

○造園科の生徒の活躍はとても嬉しいことである。現2年生は入学生徒が少なかったため心配していたが、生徒の活躍を聞いて安心した。

○自転車通学生のヘルメット着用が次年度から始まるが、現行の法律では努力義務というところで難しい部分もあると思う。また、自治体による購入助成もあり、購入に向けた費用面で差があることも気になる。安全面で必要という周知を徹底していくことが大切である。

○支援を必要とする就職への対応は今後の教育課題であり、教員以外の協力が必要である。

○アンケート結果は良い方向に進んでいるが、生徒と職員の差があるところを見ながら改善していくことが必要である。また、否定的な意見の部分も注目してほしい。

○生徒アンケートの「入学してよかった」について25%がやや否定的な意見である。この数値は他校と比較しても高いと思う。今後も結果の分析が必要である。

○少ない生徒数での掃除の負担について、小中学校のように地域連携を進めてみてはどうか。事例として学校を開放した活動を実施し、空き教室を一般開放してイベント実施後に掃除を行う企画や掃除指導などといった公民館活動に近い取り組みもできると思う。

○情報発信力は年々高まっていると感じる。ブログやSNS、マスメディアなど学校としても十分な情報発信ができています。

○80周年の記念事業について、生徒のアイデアを含めることで思いを共有できる。次の90周年や100周年といった行事の際に今回参加した生徒が協力してくれるきっかけになると良い。

○創立80周年や今後の生徒募集に向けて玉山市としても学校魅力化に協力したいと考えている。地域への情報発信については市広報紙なども特集を組むことで活用できると考えている。

5 総合評価

○本校生徒の学習状況や学校行事、日常の様子を学校ホームページやYouTube、各種メディア等で情報発信し、学校ホームページの閲覧数も前年より140,000件以上増加した。また、新たに学校公式のInstagramを開通し、学校PRの発信力を高めることができた。

○夏季休業期間にスーパーティーチャーを招へいし、現行学習指導要領の指導と観点別評価のあり方についての職員研修を実施した。また、教務部主導によるICT研修が年間を通して企画され、職員のスキル向上と授業活用が進んだ。生徒アンケートの結果からも学力保障に対応しているという設問に対し、「そう思う」19.1%、「だいたいそう思う」64.5%の結果が得られ、約85%の生徒が対応できているとの評価を得た。

○1・2年生合同による手帳甲子園を実施し、意欲的に取り組むことができた。また、手帳活用や個人のマネジメント力の向上につながった。

○日本学校農業クラブ全国大会（岩手大会）の園芸科学科・造園科から生徒が出場し、農業鑑定競技（造園の部）において最優秀賞及び文部科学大臣賞を受賞することができた。

○3学年の進学指導において、総合選抜の多様な受験にも粘り強く取り組み、高い進路実績につなげることができた。

○地域や小中学校との交流活動、専門講師による講座を新たに企画・実施し、職業観や幅広い視野の育成と学習の取組を地域にPRできる機会が創出された。

○生徒の個別の支援に対応するために、管理職、教務主任、学年主任、特別支援教育コーディネーターによる特別支援教育委員会を定期的に開催し、支援のあり方や情報共有を含めた検討についての推進体制が構築された。

○魅力化委員会（職員・生徒）を設置し、学科を越えて学校全体で取り組む組織として活動し、商品開発や対外的な活動を円滑に進めることができた。

6 次年度への課題・改善方策

- 今後も継続してスクール・ミッションや教育目標をパンフレットやホームページ、様々な校外活動等で周知し、本校を多くの方々に知っていただく取組を実施する。また、現在実施している保育園や小・中学校、地域住民との交流学习を継続し、学校を身近に知っていただく機会を創出する。
- 学習指導面では、ＩＣＴ機器を活用した授業展開の充実に向けて、職員研修によるスキルアップを継続して実施する。
- 現行学習指導要領の授業実践や観点別評価についても引き続き研修を行い、教育課程の検証と併せて確かな学力の定着と「わかる授業」の展開を心掛け、研究授業週間や公開授業を計画的に設定し、本校教員の指導力向上に努める。
- 「総合的な探究の時間」や「総合選択制」は軌道に乗りつつあるが、利点を生かせていないように感じる。生徒にとって有益に機能するよう職員研修等を企画し、制度の理念を改めて職員間で共有する。
- 育友会総会の出席率が低調であり、出席率を上げるための工夫を役員の方々と協議して取り組む。
- 特別な支援を必要とする生徒の進路希望に対応するため、教育相談部と連携して早期に進路指導の支援体制を構築する。
- いじめ防止基本方針を再確認し、全職員でいじめの未然防止に努め、人権尊重の精神に基づくいじめのない安心した学校生活を送れるよう支援していく。
- 校内魅力化委員会の組織体制を今後も継続し、玉名市を中心とした地域産業界との連携強化に努め、特色ある専門教育のさらなる充実と日頃の学習成果を地域に発信していく。また、地域産業を支える人材育成に取り組み、生徒の進路実現につなげていく。
- 学校運営協議会（総合型）では、学校魅力化と教育支援活動の活性化を進め、本校の喫緊の課題である生徒募集と人間性豊かな職業人育成に向けた協議を行い、その実現に向けて取り組む。また、今後も発生が予想される様々な災害から生徒の生命を守るため、危機管理マニュアルを随時検証し、地域と連携した学校防災を推進する体制整備を行う。
- 学校農場の有効活用のために旧畜産棟の解体を次年度行う。解体後は更地にして最終的に果樹地としての検討を進める。